

横山 彰 教授

経済政策、公共選択、財政学、
FLP環境プログラム

個の集まりである
集団を秩序ある社会へと
発展させていく
「公共選択」という視点

「総合政策学部はいわゆる「学際系」の学部。

一つの分野に特化するのではなく、学修分野は複数にわたる。

幅広い分野の知識が身につけられる反面、

何をやるかどうなるのかつかみづらくも感じてしまう。

「総合政策学部はどんな学部ですか?」と聞かれたとき、

横山彰先生はこう答える。

「総合的に政策を学ぶ学部です。」当たり前のようにだが、
これほどシンプルかつ的確な答えはないだろう。

重要なのは「総合的に」、

そして「政策」ということばをどう理解するか。

先生に詳しく伺ってみたい。

問題解決のためには
三つの装置がある

15年以上前に日本経済政策学会の
会長に選任された横山彰先生。日本
の大学で経済学を研究している学者
組織としては老舗的な存在だが、そ
の長い歴史の中でも極めて若い会長
だったという。最近は大きな企業で
も若い経営者を抜擢することが多い
が、アカデミズムの世界でも同じ傾
向があるようだ。

その横山先生によれば、「政策」と
は「より良い社会を目指す人間の営
み」のことである。私たちが暮らす

社会にはいろいろな問題がある。社
会とは「問題」の玉手箱ではないか
と思えるほど、日々のテレビや新聞
はありとあらゆる問題を投げかけて
くる。「社会で起こる問題を解決す
るためには、次の三つの装置がある
と考えられています。まず、お金。市
場原理によって問題を解決するわけ
です。次が倫理で、社会的な常識、
習慣、教育によって問題を解決しま
す。最後が力、数で、これは政治に
よる解決を意味します。市場、倫理、
政治が問題解決の基本要素と考えて
ください。」

こう説明されると、問題はすぐに

でも解決されそうな気がしてくる。
ところが、現実はその単純ではない。
例えば老人介護。以前、日本が大家
族社会だったころは、介護はその家
族の中で解決された。倫理、習慣、常
識の中で解決されるべき問題だった
のである。

ところが核家族化と高齢化が進ん
だ今、老人介護は家族という社会だ
けの問題ではなくなる。行政は高齢
者福祉を充実させなければいけない
し、シルバー産業の介護サービスへの
ニーズも高まっている。つまり、市場
倫理、政治という装置を総動員して、
政策を考えなければならぬのだ。

それぞれの社会は
相互依存関係にある

「社会といったとき、皆さんは何を
イメージされるでしょうか。恐らく
家族、学校、会社、国家などで、定
義すれば、人びとが他者との一定の
かかわりの中で暮らしている場、と
なります。社会には自然に発生した
ものもあれば人為的に作られたもの
もあります。そして、多くの場合、
それらは互いに重なり合っている。
ここが重要です。

社会にはそれぞれ、大切にしてい
るものがあります。しかし、社会は



横山 彰 (よこやま あきら)

横浜生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学。

1980年城西大学経済学部専任講師。1987年から1年間、米バージニア州立ジョージ・メイソン大学公共選択研究センター客員研究員。1991年城西大学経済学部教授。1992年慶應義塾大学博士（経済学）。1993年から中央大学総合政策学部教授。研究テーマは「財政および経済政策に関する公共選択研究」。日本経済政策学会常務理事、公共選択学会理事、日本財政学会前代表常任理事、東京都税制調査会前会長など。

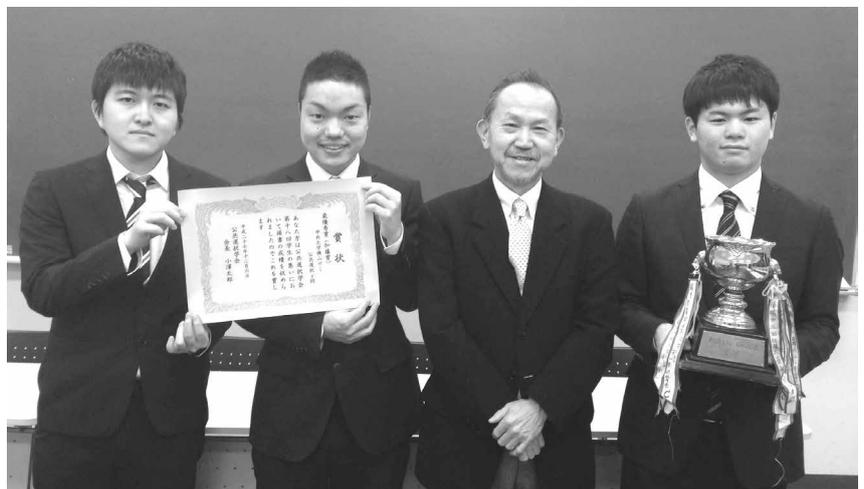
重なっている以上、ある問題は複数の社会に影響を与えることになりま
すね。価値観が同じならばあまり問
題はない。ところが現実には、ある
社会にとって望ましい政策は、その
社会と重なり合う別の社会にとつて
望ましい政策と対立することがあり
ます。

東日本大震災に伴う福島第一原子
力発電所の事故を契機に、原子力発
電そのものの存続の是非が今問われ
ています。過去にも、原子力発電所
建設についての住民投票で、新潟県
巻町の住民は反対の意思表示をし
ました。日本国という社会は原子力を
促進する政策を取ってきましたが、

それは国民にエネルギーを安定
供給するためです。ところが、
巻町という社会の住民にとつて
は望ましい政策ではなかったの
です。」

確かにこうした問題は身の回
りのいろんなところで起こって
いる。だからこそ「総合的に政
策を考えなければならぬ」の
だ。その場合、意識しなければ
いけないのは、複数の時点にお
ける複数の社会の複数の政策に
ついて、複数の主体がどのよう
に関与し、複数の判断基準から
いかに評価するのか、という視
点だと先生は続ける。

「政策を総合的に考察するとき、
知っておかなければならないポ
イントがいくつかあります。ま
ず、ある社会の政策を考えるとき
は、ほかの社会との相互依存性を踏
まえながら、政策をほかの社会の視
点から眺める複眼的な思考が必要で
す。社会は複数存在し、重なり合う
のですから当然ですね。そして、現
在・過去・未来という時間の流れの



2015年12月5-6日公共選択学会第18回「学生の集い」3年生最優秀賞を受賞したゼミ生とともに

中でも複眼的に考えなくてはいけま
せん。例えば環境政策や外交政策な
どを考えるとき、過去が現在に、現
在が未来に影響を与えることを頭に
入れなければいけない。これはつま
り、個々の社会に固有の歴史の重要
性を意味しています。」

あらゆる条件を踏まえ 複眼的に思考すること

また、政策と言っても「政策課題」の設定と「政策手段」の選択の二つがある。政策課題とは、社会がどのような社会問題を解決して「より良い社会」をめざそうとしているのかを明らかにすることであり、政策手段は政策課題に対する解決策で、より良い社会を実現するための方策を意味している。

「現下の日本の社会経済は、社会保障制度の劣化、所得格差の顕在化、膨大な財政赤字、地球温暖化問題、そして東日本大震災からの復興と原発事故を契機としたエネルギー制約、さらにはグローバル経済の中で一層の自由化といった本当に厳しい状況の下にあります。こうした政策課題のいずれを優先的に解決するか、ある政策課題を解決しようとするとか、ある政策課題を深刻化させてしまふ相互依存性があるのかどうか。こうした複眼的な思考も必要です。

例えば、地球温暖化問題を考える



2014年9月27日 淑徳大学千葉キャンパスでの合同ゼミ後の集合写真：ゼミOBの中澤克佳准教授（東洋大学）、矢尾板俊平准教授（淑徳大学）とゼミ生たちと一緒に

場合、規制だけでなく環境税など経済的な手段も考えられます。その実現可能性、相互依存関係を複眼的に検討する姿勢が、有効な政策のためには欠かせません。

政策決定に関与している主体が複数存在するという視点も必要です。政策の決定権がどこにあり、実施すれば誰にどれほどの利害損失を与えるのかによって、その社会の政策決定は違ってくるのです。また、政策を判断し、評価する基準も

一つではなく複数存在します。経済至上主義的な考えだけで解決策を選択してしまわないように、価値評価体系が単一でないと認識することこそ、政策を『総合的に』評価するための第一歩だといえます。

まとめると、『さまざまな時代』における『さまざまな社会』の『さまざまな政

策』について、『さまざまな主体』がどのように関与して『さまざまな判断基準』からいかに評価するのか、という視点から総合的に政策を研究するのが総合政策なのです。

総合的に考えなければならぬ政策の研究分野で、横山先生の専門は「公共選択」。聞き慣れないことばだが、人は皆自分自身の私的利益を追求する主体であると仮定し、皆が自分勝手に自身の利益を追求しながらも社会がうまく成り立つには、どういう仕組みが必要なのかを考える学問である。

例えば、皆さんが寝るときに腹はいだろうがおおむけだろうが、それは個人の自由で他人にとやかく言われる問題ではない。しかし、所有するビルをショッキングピンクに塗ったとしたらどうだろう。個人の所有物なのだから何をしても構わないとも考えられるが、社会に影響があるのは明白である。私的選択を基本としながらも、そこには少なからず公共性が入ってくる。

「この考えは家族、会社、国家といっ

たあらゆる社会でも同じです。各行動主体は各々の私的利益の増大を目的に行動する、というのは経済学的前提です。現実それぞれ個人や社会が譲ることのできるものとできないものを持ち、長い目でみた利害得失を考えながら、お互いに歩み寄ることで世界は成立しています。その問題を考え、より良い制度やルールを提案しようとするのが公共選択です」

大学院時代から芽生えた「公共選択」の研究

慶應義塾大学の学部と大学院で素晴らしい先生方と出会い、研究者になろうと決意。大学院時代に、単に経済現象を分析し、将来の動向を予測するだけの学者にはなりたくないと横山先生は思っていた。

「経済を中心に人間をどうとらえ、人びとが自分の利益を追求することでどうやったら社会全体がより良くなるのかを明らかにしたい。社会の



2011年12月3日の横ゼミ会（年1回開催されるOBOG会）に出席の卒業生とともに

ルール決定、制度はどうあるべきかを提言していきたいと考えていました。大学院には7年在籍したんですが、朝から晩まで公共選択関連の文献をひたすら読み込み、1.5だった視力が大学院を出るときには0.3にまで落ちていました。」

最後に、総合政策学部を目指す高校生たちに何かメッセージがあればと伺ってみました。

「あらゆる方向からの複眼的な思考が総合政策には欠かせないと言いましたが、高校時代にして欲しいのは、自分が大切にしたいと思うのはどんな社会なのか、を考えることです。その社会の価値基準は何であり、より良い社会を実現するためには何が必要であり、社会を変えるためのパワーは何であり、どうすればそれを手に入れられるか

を考えて欲しい。複眼的な思考を身につける前に、現時点での自分自身の考え、主義主張を明確にする必要があるからです。この学部に入るとさまざまな学問分野の講義を受けることになりませんが、自分自身の問題意識や大切にしたい価値などの根っこにあたる部分がしっかりしていれば、知識の幹を太らせながら枝葉を伸ばしていける。でも、根っこが脆弱だと幹も太らなければ枝葉も伸びません。」

そして、「前提を疑え」ということばも残した。ぐるりと見回してみると、社会は前提だらけである。「○○に違いない」という前提のもとに、深く物事を考えず行動するパターンが多いはずである。「ほんとに?」「なんで?」と前提を疑うことから、複眼的な思考は養われていく。「前提を疑ったら事実関係を調べてみる。すると、自分の中に社会を見るための窓が増えていきます。こういう考え方のできる人にとって、総合政策はとてもやりがいのある学問になるはずですよ。」